

あの戦争を語り継ぐ
平和宣言都市
30周年記念連載⑥

志満宣子さん 74歳
しまのぶこ

笹塚地区在住

幼い日の思い出

「ドカーン」という音で目が覚めて顔をあげると、目の前のガラス窓は一面赤く染まっていた。岡山の教会の二階で寝ていた私たちは、着の身着のまま、3歳の私は母におぶわれ、5歳の姉は母に手を引かれて庭に出た。1945年6月末日のことである。牧師だった父は一カ月前に病死し、お骨になっていたが、母には持ち出す余裕がない。「急いで！」とメガホンを持った男性に促されて、指定

の防空壕ぼうくうごうに急いだが、すでにいっぱい入れず、走って他の防空壕に転がり込んだ。東京大空襲を経験した人がいて、トタン板で火が入るのを防いでくださり、「熱い、熱い」と言いつつも皆、何とか助かった。姉と私はその間「神様、明日の朝まどうにか守ってください」と手を合わせ祈り続けた。

夜が明けて外へ出ると一面焼け野原に、教会の石の門が二本立っていた。母から教会の門に別れを告げるように言われ、信州（長野県）上諏訪の母の実家へ帰るために岡山駅へと急いだ。私をおぶった母は焦土をほだしで、姉は母の大きな足袋を履いて、駅近くの石炭の山が燃えている岡山駅から汽車に乗った。私たちの姿に、見ず知らずの

人が母に草履を、姉の膝にはおにぎりや果物をくださったり皆さんの善意に支えられ、母の実家にたどり着くことができた。実家は同年齢の男子4人で食べるものはない。私が食べたいごちそうを言うと母は色鉛筆で絵を描いて「はい、お待ちとおさま」と言ってみせ、私たちは食べる真似をして満足して眠りについたことを思い出す。

いつの時代も戦争の犠牲者は弱者であることを痛感する。

◆防空壕 敵方の航空機の攻撃から避難するために地下に造られた施設で多くは穴を掘るなどして築いていた。

■ 企画政策課男女共同参画室内線3354

※体験談を募集しています。